

内田修のジャズ鑑賞

③

大学生になって間もなく、

ラジオの番組「スイング・クラブ」を聴いてから、ジャズに対する興味が少しずつ膨らんでいったように思う。年々からいつて知識欲だけはおう盛だから、何とかもつときちんとしたことを知りたくなつたが、そう簡単に資料らしいものが手に入る時代ではない。

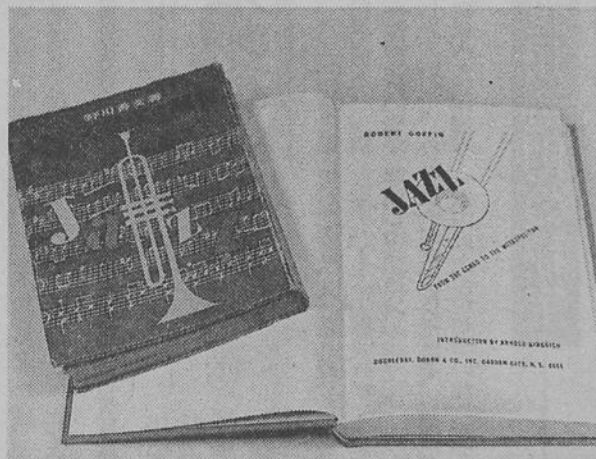
そんなある日、時々通っていた「アメリカ文化センター」の図書室で、素晴らしい本にめぐり合った。

(こは名古屋・大津橋差支点の東端にあった木造二階建てで、当時の学生たちにとって、とてもありがたい宝の山だった。何せあらゆるジャンルの本が無料で自由に借りられたのだ。

そこで偶然、見つけたのがベルギーのジャズ研究家で、本業は弁護士さんというロベール・ゴーフマン氏の書いた「ジャズ」というものなのだ。

ばりの本だった。

これには「コンゴからメトロポリタンまで」という副題がつけられており、遠くジャズの源とされるアフリカに始まって、いろんな道のりを経て、ついにはニューヨークのヒフキ舞台で、コンサートが開けるまでになったジャズ



内田修さんが勉強した『ジャズ音楽の鑑賞』巻と英文の『JAZZ』

の歴史のお話なのだった。大変面白かったが、何しろ初めて見るミュージシャンの名前やレコードタイトルが、次々に出てくるのでとても覚え切れないのは当り前。といつて、今みたいに便利なコピーの機械はない。

『ジャズ音楽の鑑賞』読み返す

手書きで写してしまったのが、何冊かのノートになっている。若かったんだねえ。こんなふうに書くとは、英語がすらすら読めるみたいで辛

で今でもとても尊敬している。発行は昭和二十三年十一月二十五日で二百五十円とある。そのころとしては高かったんだねえ。

がすらすら読めるみたいで辛ざつばいが、本当は日本語の本がよいのに決まっている。そのころは、まだ松坂屋本店の向かい通りに、古書を含めた本屋さんがずらり並んでいた。その一軒で「ジャズ音楽の鑑賞」という背文字を見たときはうれしかったなあ。今でも大切にとつてあるから久しぶりに取り出してみた。また安っぽい紙しかないうえに、何度も読み返したせいで表紙はかなりすり切れている。

開くとあちこちに傍線が引いてあり「一九五〇年十一月二十二日名古屋で購入」なんていうメモが記してある。そうか大学一年生だったんだ。著者は野川香文氏。日本のジャズ評論の先覚者だった方

「一われわれはこれからジャズが辿(たど)つて来た道を知り返つて見ろ(なが)ら、その音楽の本質を見て行かうではないか。日本はこれから文化国家として新しく発足しやうとあるのだから、最も一般的な現代文化の一つであるジャズ音楽を知る事は、私達の義務でもあると思ふ」(原文のまま)

こんなすてきな姿勢に買われた本で、入門できた僕は本当に幸運だったんだねえ。

(内田修)